

## 高田馬場におけるラーメン店集積のメカニズム

亀本 さやか

東京都新宿区の高田馬場駅周辺はラーメン激戦区として名高く、現に55店舗ものラーメン店が営業を行っている。ラーメンは歴史の浅い料理であるため、その調理法は発展途上であり制約がない。そのため極めて各店に固有のバリエーションを持っており、一定レベルの味を超えると集積しても競争にはならない。またラーメン店を開業するには長年に渡る修行ではなく独自の調理法が重要だといえる。よってラーメン店を開業するために常に食べ歩き研究する姿勢が求められはするが下積み期間は短く、またその店舗形態から開業資金も比較的安く済むため業界への参入障壁は低い。本研究ではラーメン店集積の現状と集積過程の調査、高田馬場を生活圏とする早稲田大学の学生へのアンケート調査を行った。そしてその結果から高田馬場におけるラーメン店集積のメカニズムについて考察した。

調査の結果、高田馬場で現在営業している店舗のうちそのほとんどが通り沿いに位置しており、55店中29店が2005年以降に開店した新しい店で、その店舗の雰囲気は従来のラーメン店像に当てはまらない独自性の強い店が多い。元ラーメン店の空店舗は3店あり、そのうち1店舗はまた別のラーメン店が入居することが決定しており、これは高田馬場では頻繁におこっている事例である。そしてアンケートより早大生は十分に高田馬場のラーメン集積を認知しラーメンを食べていることが分かり、とはいえ好きなラーメン店・嫌いなラーメン店を聞いたところ全店のうち半数以下の20店舗しか名前があがらず、そのうち7店は好きな店としても嫌いな店としても名前が挙げられていた。

つまり、自信と向上心のあるラーメン店主にとって高田馬場はチャレンジングな土地であるた

め、イノベーションを起こしうるラーメン店が多く集まり刺激を与え、その中で質の高いラーメン店が残っていくことで高田馬場のラーメン街としての価値が高まっている。こういったダイナミズムを含んだラーメン店集積傾向をもつ高田馬場は発展途上であるラーメンという料理、そしてラーメン業界にとって大変意義深い場所であるといえる。

## 西荻窪におけるアンティークショップ集積の起因と要因

黒澤 織江

JR中央線沿線の西荻窪駅周辺には、多くのアンティークショップがある。「西荻窪アンティークマップ」というものまで発行されており、64軒のアンティークショップが紹介されている。このマップは駅前の交番を初め、掲載されている店舗で無料でもらうことができる。そのため、休日になるとこのマップを持って西荻窪を散策する人々をよく見かける。24年前にアンティークマップを作った当時はたった9店舗しかなかったアンティークショップがここまで増えたわけは、この9軒をアンティークショップとしてひとまとめにし、地図化したことにある。実際はこの9軒のなかにはリサイクルショップが含まれており、厳密な意味でのアンティークショップではない。しかしアンティークマップが存在することで、人々は「西荻窪ってアンティークの街なんだ」と考えたに違いない。遠くから遊びにくる人、西荻窪でアンティークショップを開く人が増え、アンティークマップが発行された次の年から、アンティークショップの数は右肩上がりになった。現在でもこのマップに掲載されている店は、全てが厳密な意味でのアンティークショップだというわけではない。生活雑貨のリサイクルショップや、外国の民芸品を売っている店もある。しかしここで重要な

のはアンティークショップとしてひとくくりになって地図化され、人々に西荻窪はアンティークの街だという印象を植え付けることにある。また様々なジャンルのお店をマップに掲載しておくことで、より広い客層にアプローチすることができる。

西荻窪にはアンティーク以外の魅力もある。幸いにも戦災を免れたため、今でも昭和の面影を残している場所がある。タウン誌では、アンティークショップで物色しつつ、昭和の雰囲気を楽しみ、おいしいご飯を食べて帰るといった散策コースを頻繁に提案している。

そして西荻窪を愛するのアンティークショップ店主たちによる街おこしでもあるのだ。

## ソウル市における教育環境と住居移動との関係：陽川区木洞を事例に

野崎 美智子

韓国、ソウルには教育的に好まれる地域が存在し、人々は教育目的でその地域へ移動するという現象がある。これは日本ではみられない、興味深い現象である。本研究では、ソウルにおいて教育的に好まれる地域が発生し、人々がそこへ集まっていき、その結果、地域イメージが新たに形成されるという現象について、韓国における教育と住居、不動産との関係から論じた。

これまで、教育的に好まれる地域として江南地域を対象とする研究がほとんどであったが、本研究では陽川区木洞を対象地域とし、その場所形成から教育的に好まれる地域として吸引力を持つに至る過程を明らかにした。

前提として、韓国の教育や不動産制度について触れ、高等教育制度と教育熱という韓国独特の要素の上に、不動産制度と住居移動の相互関係が相まって、ソウルにおいて教育的に好まれる地域が形成され、人々がそこへ集まってくることを示し

た。ここでは文献調査を主に行い、統計データの分析も多少取り入れて考察した。

このソウルにおける現象を念頭に置きながら、本研究の対象地域である木洞が教育的に好まれる地域として場所性を持つようになった背景を考察した。ここでは1980年代に行われた新市街地開発に至る歴史的背景や開発の過程を追いながら、木洞新市街地の場所形成について述べた。その上で、木洞において教育特区という場所イメージが形成され、それに伴って不動産価格の上昇が起きていることを、雑誌記事や統計データの分析を通して示し、これを木洞の吸引力とした。

また、ソウル市で起こっている居住地分離が陽川区内の新市街地地域においてみられることにも言及した。これより、木洞の吸引力と居住地分離が、教育的に好まれる地域としての木洞独自の場所性を形成することが明らかとなった。

## カナダ・ビクトリアに集まる日本の若者たち：ESL生のステイ先選択

藤田 朋代

本論文は、近年の日本の若者たちを中心にみられる第二言語としての英語習得（ESL：English as a Second Language）のために海外渡航をするという新しい社会現象に顕著な一都市への集中を、カナダ、ビクトリアを事例として分析する。日本人ESL生の一都市への集中を考える上で、その要因を日本側に存在するものとホスト国側に存在するものにそれぞれ分類し、その要因が実際にどのようにこの社会現象に影響しているのかを考える。

はじめに日本社会、日本の教育の中での英語のニーズおよび日本社会のストレスからの脱出法としてESLの拡大を取り上げる。次に、その受け入れ先であるカナダおよびビクトリアの地理的好条件と日本との外交関係、観光政策にみられる日本人を引き付ける要因について論じ、論文の後半